The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | The Paradigm Shift in Obesity Research and Its Ethical and Cultural Implications |
| Author(s) | Kasch, Franziska |
| Citation | 大阪大学, 2016, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/55681 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Form 3

# Abstract of Thesis

| Name （Franziska Kasch） | |
|---|---|
| Title | The Paradigm Shift in Obesity Research and Its Ethical and Cultural Implications<br>（肥満研究におけるパラダイム・シフトとその倫理的及び文化的意味） |


Abstract of Thesis

現在、肥満対策といえばダイエットと運動が一般的であろう。世界中の政府が健康向上のため肥満に注目し、ダイエットと運動を進める措置を講じている。特に、「肥満流行」（obesity epidemic）が話題となって以降、そういった措置が普及しているが、同時に肥満は倫理学の対象となった。そこで、学会誌のレビューによって肥満に関する倫理的な議論を理解することが、この論文の目的の一つとなる。

学会誌で発表された論文155件をレビューした結果、肥満に関して倫理的に議論されているテーマは主に三つに分けられると分かった。

一つ目のテーマは、肥満に関する言説である。そこでは、「肥満流行」というのは実際に「モラル・パニック」（moral panic）に過ぎないと批判されている。肥満は今流行っており、様々な病気の原因であると言われているが、この見方を批判する者は、肥満がそれほど増えていないし健康に悪くないことを示すデータもあると指摘している。しかし、これらのデータは肥満研究で無視されがちで、これは肥満の医療化と道徳化の結果であると批判されている。肥満の歴史を調べたら、肥満は昔から存在し、道徳的な問題とされたことが明らかになる。ゆえに、肥満の道徳化が徐々に進んで、現在のモラル・パニックを生んだと言える。そのうえ、肥満の人はスティグマ化され、日常生活の色んな場面で差別の対象となった。

二つ目のテーマは、肥満対策における倫理的な問題である。まず、ダイエットは肥満に効果的ではなくて、様々な健康リスクがあるが、この事実はダイエット・プログラムの参加者に普段伝われないので、インフォームド・コンセントの問題がある。また、近年は肥満外科手術の急速な増加が見られるが、その実効性や安全性についてはまだ疑問が残っている。さらに、肥満外科手術前の手続きは医学的な理由より患者の道徳性を確認するために行われていると批判されている。そして、運動は体重の増減にかかわらず健康に良いのに、肥満対策として注目されていることから、肥満対策はより健康的な国民ではなくて、より良い国民を目指していると言える。

三つ目のテーマは、肥満とそれに伴う病気の責任と健康資源の正義的な分配である。遺伝子の影響があるとしても、肥満は主に個人的な生活習慣を反映していると考えられている。生活習慣を選択するのは個人なので、肥満そして病気になればその責任は個人に帰せられる。ゆえに、肥満の人は痩せる義務があり、痩せる対策を取らない場合は肥満に伴う病気の治療へのアクセスを拒否しても良いという意見がある。これは「運の平等主義」（luck egalitarianism）による考え方である。もう一方、個人は社会的及び経済的な事情もあり、生活習慣を自由に選べないという指摘もある。それに、肥満の原因は生活習慣ではないという批判もある。これは、現代の工業化や自動化された世界は「肥満生成環境」（obesogenic environment）であるので、肥満になる責任を担うのは個人ではないという立場である。といえども、肥満対策を取るのは肥満生成環境言説によっても個人の責任である。

上述した倫理的問題はすべて肥満研究のパラダイムであるエネルギー収支説のうえ議論されている。しかし、近年は肥満研究にてパラダイム・シフトが起きており、これらの問題を新たに評価する必要がある。これがこの論文の二つ目の目的である。

肥満に関する倫理的な問題を再評価する前に、肥満研究におけるパラダイム・シフトと肥満研究の新しいパラダイムを検討しなければならないので、トーマス・クーンが『科学革命の構造』（1962）にて記述した説を考慮してエネルギー収支パラダイムとその生成及び影響を説明する。クーンによると、パラダイム・シフトが起こるにはパラダイムの解決できない「危機」が必要であり、肥満研究においては肥満流行がそういう危機であると筆者は考える。ダイエットと運動など、エネルギー収支パラダイムに基づく肥満対策の無効性が肥満流行によって判明した結果、肥満研究者の一部はこれまでの肥満研究を再検討して、エネルギー収支パラダイムと違う説があることが判明した。

この説によれば、肥満の原因はホルモンの異常である。ゆえに、ホルモンの異常を治せば、痩せることも肥満に関係ある病気を治すことも可能となる。肥満とそれに関係ある病気の主な原因となるホルモンの異常は、インスリン抵

抗性であるので、インスリンが肥満や病気の発生に大きな役割を果たしている。なお、炭水化物を食べるとインスリンが分泌されるので、炭水化物の摂取を制限すること、つまり糖質制限ダイエットが肥満対策となるのである。そこで、糖質制限ダイエットを肥満対策とすることによって起こりうる倫理的な問題を再検討した。

まず、糖質制限ダイエットは肥満対策にも病気予防にも効果的であるとしても、炭水化物は多くの文化において主食であり、食べ物以上の意味を持っているので、炭水化物の摂取を制限することによって文化的なアイデンティティを損失する可能性があり、炭水化物をやめられない人もいると考える。それで、これらの人は炭水化物を食べたせいでインスリン抵抗性となり、肥満や病気になれば、その責任はその人自身にあると言える。運の平等主義の上に議論すれば、その人にはインスリン抵抗性に伴う病気の治療へのアクセスを拒否してもいいけれども、インスリン抵抗性になるかどうかは遺伝子などの因子にもよるので、それは不正義であると本論は主張する。

また、糖質制限ダイエットを健康向上のために進めることにも様々な倫理的問題が起こりうるので、普遍的な制限より個々人が自分の体質や価値観に合うように調整できるような、糖質を減らす作戦に関する知識を普及したほうがいいと本論は主張する。

結局、肥満研究におけるパラダイム・シフトはこれから医学に発展しつつある大きなパラダイム・シフトの一部であると考える。このパラダイム・シフトによって、医学は改めて食習慣に注目し、個々人の体質や事情に合った食べ物を治療とするであろう。それに、肥満研究におけるパラダイム・シフトには身体の働き方と病気の原因について新たなモデルが含まれているので、我々の生き方と生きる環境を考え直す必要があるだろう。

様式 7

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏　名　（フランツィスカ・カッシュ） | | |
|---|---|---|
| 論文審査担当者 | （職） | 氏　名 |
| | 主 査　大阪大学　教授 | 浜渦　辰二 |
| | 副 査　大阪大学　教授 | 須藤　訓任 |
| | 副 査　大阪大学　元教授 | 中岡　成文 |
| | 副 査　京都女子大学　教授 | 霜田　求 |

**論文審査の結果の要旨**

以下、本文別紙

様式７別紙

# 論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　The Paradigm Shift in Obesity Research and Its Ethical and Cultural Implication

学位申請者　フランツィスカ・カッシュ

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　浜渦　辰二

副査　大阪大学教授　須藤　訓任

副査　大阪大学元教授　中岡　成文

副査　京都女子大学教授　霜田　求

【論文内容の要旨】

本論文は、医療倫理の新しい分野として近年注目されている公衆衛生倫理のなかで、国際的にも重要課題の一つとなっている肥満の研究において、近年起きているパラダイム・シフトを解明し、その倫理的および文化的意味を考察する、英語で執筆された論文である。

伝統的なエネルギー・バランス・パラダイムによると、身体活動が必要とするよりも多くのエネルギーを摂取することが肥満の原因であり、したがって、肥満対策は、「カロリー摂取を減らし、カロリー消費の運動を増やす」ことになり、それでも肥満という人は、意志が弱くなまけものということになり、ひいては最後の手段として、カロリー摂取を制限するために胃を小さくする外科手術まで使われる。そこでは、肥満の言説が、個人だけに焦点が当てられ、その人の社会的経済的状態や労働環境などが無視されて、スティグマと差別が医療関係者にも広がり、当人の生活スタイルの選択に原因があるということで、責任や医療資源配分の問題も問われることになる。

それに対して、肥満の原因をホルモンの異常と考えることから、肥満についての新しいパラダイムが生まれた。肥満とそれに関係する病気の主な原因となるホルモンの異常は、インシュリン抵抗性であり、インシュリンが肥満や病気の発生に大きな役割を果たしている。炭水化物を食べるとインシュリンが分泌されるので、炭水化物の摂取を制限すること、つまり糖質制限ダイエットが肥満対策となる。これが、肥満研究に新しいパラダイムをもたらすことになった。それがどのような倫理的および文化的意味をもつかの考察が、本論の中心となる。

第１章「序論」では、問題の概観ののち、本論文で使う資料と考察方法とともに、本論の流れを紹介している。

第２章「肥満と倫理学」では、科学ジャーナルに発表された論文 155 本の体系的なレヴューに基いて、それらを１）「肥満流行」と「モラル・パニック」という言説による肥満の医療化と道徳化、２）肥満に対する介入（外科手術を含め）とその倫理的問題、３）責任（個人のライフスタイルと肥満を生む環境）と正義（医療資源の正しい配分）という３つのグループに分類して、肥満と倫理学に関する最近の言説を要約し、そこから、肥満とのその倫理的問題がエネルギー・バランス・パラダイムのもとに論じられていることが明らかとなる。

第３章「肥満研究におけるパラダイム・シフト」では、パラダイム・シフトという考え方を科学史に導入したトマス・クーンの著書『科学革命の構造』を手がかりに、パラダイムと通常科学の意味を解明し、伝統的なエネ

ルギー・バランス・パラダイムに固執する研究者の活動が通常科学とみなされ、それが「肥満流行」という危機を経て、肥満をホルモン欠乏（インシュリン抵抗性）の結果とみなすパラダイムへと転換するさまを解明する。そしてそこから、まだ議論の分かれるところではあるが、カロリー制限のダイエットよりも、低炭水化物高脂肪（LCHF）ダイエットが多くの医療職と患者によって受け入れられていることも説明されることになる。

第４章「肥満研究における新しいパラダイムとその倫理的および文化的意味」では、この新しいパラダイムのもとでの肥満と倫理学を再検討する。インシュリン抵抗性は、出生や周産期に使用される抗生物質により細胞にプログラムされてしまったり、労働・生活環境から来る睡眠不足やストレスから生じることがあり、それを個人の責任に帰するわけにはいかないし、炭水化物が文化的アイデンティティの一部だったり、比較的安価であるため、低収入家庭に炭水化物制限食を強制することはできない。こうして、新しいパラダイムに基づく低炭水化物高脂肪（LCHF）ライフスタイルの促進が与える影響を、身体的健康、心理社会的ウェルビーイング、平等、インフォームド・チョイス、社会的文化的価値、プライバシー、責任、自由と自律という八つの倫理的問題に即して検討し、その倫理的意味を再検討する際に文化が重要な役割をもつことを確認する。

第５章「結論」では、本論文の見出したことを要約し、医療と健康促進にとって肥満研究におけるパラダイム・シフトがもつ広い意味を指摘している。それは、医療モデルから医療と健康促進の分野全体に広がり、人間の体内で微生物が果たす役割から、さらに食事が医療から切り離せない事、私たちがいかに環境のなかに生き、環境を配慮しているかも考えないといけないところまで導かれる。

最後に、参考文献リストを付し、全体の分量としては、英文の A4 判横書きで 156 ページとなっている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、医療倫理に関心をもつ日本学研究者として、2008 年に日本政府がメタボリックシンドローム対策として発表した診断規準の背景にある肥満についての言説への関心に端を発し、特に、肥満の治療と予防に含まれている倫理的問題に関心をもち、自分自身が子供の頃から体重超過に苦しんできたこと、また祖母がくり返しダイエットをしながらも太っていくのを見てきたこと、肥満の解決はそんなに簡単ではないと感じてきたこと、そうした自らの体験を踏まえて考察しようとする、倫理学に基づく臨床哲学専門分野にふさわしい論文となっている。低炭水化物高脂肪ダイエットとの出会いは、絶えずカロリー計算をし、体重のことを気にすることから、著者を解放し、研究に新しい方向を与えたというが、それがトマス・クーンの科学革命についての著作の精読に導き、肥満研究における転換をパラダイム・シフトとして見るという洞察を得ることになったとのことで、日本学から臨床哲学に進んできて、科学哲学と医療倫理を繋ぐ考察が、本論文のオリジナリティとなっている。

公開審査会では、科学ジャーナルから「肥満」と「倫理学」をキーワードに検索してヒットした論文を解読する第２章の作業は、骨の折れる作業で圧巻とはいえ、迂遠な印象を与える一方で、問題を掴むのに適切な絞り込みであったかの疑問が呈され、クーンのテキストにまで遡ってパラダイム・シフトを考察しているのは誠実な作業とはいえ、ここで示された「エネルギー・バランス・パラダイム」から「ホルモン異常パラダイム」への転換をクーンのいう意味でのパラダイム・シフトと呼ぶことができるのか、また、低炭水化物高脂肪（LCHF）ダイエットについてはいまだに医学界でも賛否両論があり、これが新しいパラダイムだという前提で書かれていることに問題はないかといった疑問も出されたが、本論文が、肥満研究の転換をパラダイム・シフトという構図で見るというチャレンジングな試みによって、倫理的および文化的意味について考察するための新しい視野を提供できているという点において、評価に値するものとして意見は一致した。

よって、本論文を博士（学術）の学位にふさわしいものと認定する。